韓国映画『ラブストーリー（原題：クラシック）』の大学生の鑑賞とその後の韓国観の変化

三　宅　博　之
（法学部　政策科学科）

キーワード

『アジア地域社会論』　共生社会　韓国映画　ベトナム戦争

要旨

筆者は常々、担当講義科目『アジア地域社会論』の受講生である政策科学科の学生に対して同科目の狙いである、「気軽に海外に出かけ、外国の文化や社会を自らの眼で観察してほしい」と願っているものの、学生たちはお隣の韓国さへもなかなか足を運ばない状況である。そこで、高校生や大学生が主人公を務める韓国映画『ラブストーリー（原題：クラシック）』（2003 年作）を探し出し、受講生に見せた結果、高評価を得た。したがって、毎年受講生に鑑賞してもらうことにした。ストーリーは、1960 年代後半と 2000 年代初頭の母娘がお互いの青春時代に体験した恋愛を比較しており、その際に、いかに以前が封建色が強く、様々な規制や障害があり、結果として悲恋に終わらざるをえなかった一方で、現在では悲恋に終わった恋愛が双方の子どもを通じて成就していくといったものである、そのストーリーや映像は、受講生に感動を与え、韓国へのイメージを格段に良くしたという評価が下された。海外旅行が可能になる今だからこそ、韓国にはぜひとも出かけてほしい。

はじめに

今年に入っての新型コロナウィルスのオミクロン株の感染が拡大する中で、今後はウィズ・コロナの生活が求められている。この間、感染する可能性を低くするために、かなり厳しい規制が行われてきた。しかし、オミクロン株の正体が徐々に解明されるごとに、規制が緩和され、人々は外出するようになり、新型コロナ発生前と全く同じではないが、前向きに生活や労働を行うようになった。

大学の授業も２年前はonlineで行われたが、昨年から福岡県や北九州市の感染者数の増減に目を配りながら、対面で授業が行われるようになった。筆者は、法学部政策科学科で『途上国開発論』や『アジア地域社会論』の講義科目を担当している。政策科学を学ぶ学生には、今後、さらに増加するであろう外国人と共生するために必要な感覚、知識や能力を身に付けてもらいたいと切に願っている。そのためには、途上国やアジアの国々をもっと身近に感じてほしいと考えている。そこで、導入として価値観がかなり変わる、また、評価が高い映画を鑑賞してもらうことを思いついた。映画は本稿でとりあげる韓国映画である。外交関係が芳しくない時期もありつつも、最近ではK-pop や韓ドラなどを通して、市民レベルではお互いを理解しようとの動きが際立っている。韓国の現代史が学習でき､ストーリーの中に恋愛が出てくれば、学生は喜ぶであろうと考え、結果『ラブストーリー（原題：クラシック）』を選び出し、受講生に鑑賞してもらった。

映画の何が感動させるのか、さらに映画に対する評価はいかなるものかを受講生に示してもらい、最終的には韓国に対する印象は変化したのか？を答えてもらった。それらの結果を本稿で示そうと思う。

第１章　問題の所在

前述のように、筆者は法学部政策科学科で『アジア地域社会論』という講義科目を担当しており、長年、受講生には、アジアの国々をいかに身近に感じ、きちんと理解してもらっているかを考えている。最良の方法は、ある程度の知識を身につけ、自らの足で当該国に直接出かけ、五感でその社会をとらえてもらうことである。筆者のゼミでは、１学年の際に隣国である韓国に出かけ、本学の姉妹協定校である釜山の韓国海洋大学の学生と交流をしたり、2、3学年次にはインドネシアやバングラデシュに出かけ、環境学習や平和学習を行っている。それらのスタディ・ツアーは、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点から、非常に教育効果があったように筆者自身理解している[1]。しかし、ゼミはある程度の人数に絞りこまれているので、スタディ・ツアー自体は実施可能であるが、他方、講義科目となると人数が多いのでそうはいかない。直接訪問することなしに、アジア諸国の現代の歴史や社会状況についていかにして受講生に興味を抱かせ、理解してもらえるかの方法を考えていた。アジアの対象国として、まずは韓国を選んだ。

その理由は２点ある。１点目は、日本と韓国の現在の社会・経済問題の類似性である。現在、日本は少子高齢社会に突入し、合計特殊出生率は、1.3前後で推移している。他方、韓国はと言えば、0.86といった信じられないほどの低い数値があがってきている（https://www.

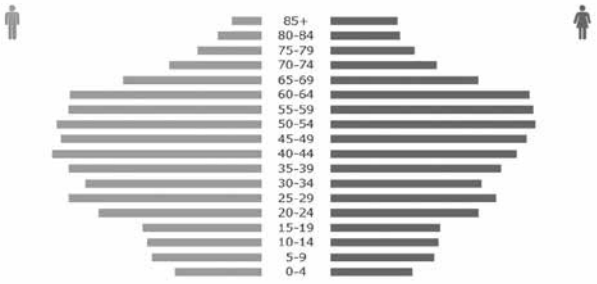

図１　韓国の人口ピラミッド

出所：An official website of the United States government https://www.census.gov/popclock/world/ks

nikkei.com/article/DGXZQOGM231MW0T20C21A2000000/）。近年、人口の自然増減はマイナスに転じ、海外からの結婚パートナーや労働者の流入により、辛うじて、人口を保っていると言われている。さらに、図１の人口ピラミッドでわかるように、40 代から 60 代にかけて最も人口が多い。これと同時に、男女の性別人口バランスの相違に注目する必要がある。年齢群別に紹介すると、85 歳以上では、男：0.6%（総人口に対しての占有率）、女：1.3%、80-84 歳（男：0.9%、女：1.4%）、75-79 歳（男：1.3%、女：1.7%）、70-74 歳（男 :1.8%、女：2.1%）、65-69 歳（男 2.7%、女：3.8%）、60-64 歳（男：3.8%、女：4.0%）、55-59 歳は（男：3.8%、女：4.0%）、50-54 歳（男：4.1%、女：4.1%）、45-49 歳（男：4.0%、女：3.9%）、40-44 歳（男：4.2%、女：3.7%）、35-39 歳（男：3.8%、女：3.4%）、30-34 歳（男：3.5%、女：3.0%）、25-29 歳（3.8%、3.3%）、20-24 歳（男：3.2%、女：3.0%）、15-19 歳（男：2.4%、女：2.2%）、10-14 歳（男：2.3%、女：2.1%）、5-9 歳（男：2.2%、女：2.1%）、0-4 歳（男：1.7%、女：1.6%）であった。50 代以上は、男性より女性人口のほうが多いが、40 代以下は男性の方が多い。20 代～ 30 代の 5 歳群別人口は男女とも総人口の 3%だが、10 代以下は 2%台、5 歳未満に至っては、1%台に落ち込んでいる。近年、女性の非婚化が顕著になり、同時に、女性人口も減少気味であることが、若年層の人口減に繋がっている。

若者の非婚化、若年人口の減少など、韓国ほど極端ではないものの、日本も同様の傾向が出ている。さらに、社会的に類似する問題としてジェンダー不平等を指摘することができる。ジェンダーギャップ指数（世界経済フォーラム版）を見れば、日本が 120 位、韓国が 102 位となっている。日本の分野ごとの順位は、経済が 117 位、教育が 92 位、健康が 65 位、政治が 147 位となっている。 経済では、企業、行政など、管理職にどれほど多くの女性が就任しているかが 1 つの指標として調べられている。

韓国では、昨年、自殺による死亡者は 1 万 3195 人と、前年比 4.4％減となった。 1 日平均 36.1 人の割合で死亡者が発生するという計算になり、人口 10 万人当たりの自殺死亡者数を示す自殺率は 25.7 人、前年比 4.4％減少している。しかし、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）加盟国の中で最も高い水準であり、平均（10.9 人）の 2.1 倍に達している（https://www.donga.com/jp/Search/article/all/20210929/2950759/1）。日本での自殺者数は、2020 年で 2 万 1081 人とかなり多い。このような点から非常に似通っていることが理解できる。

韓国を選んだ第２の理由は、北九州市や福岡市といった北部九州から短時間で韓国に行けるというその近接性である。北九州や福岡からは、交通手段が多様化するに従い、国内旅行の感覚で気軽に出かけられるようになった。筆者のゼミの場合、1990 年代から 2000 年代初めまではフェリーや高速艇といった海路を利用し、今世紀に入っては、LCC（格安航空）便の登場とともに、空路で直接出かけるようになった（福岡―釜山で 40 分、LCC 利用で往復 1 万 5000 円程度）。大学生にとって、費用があまりかさまず、時間もかからないことは重要である。これらの好条件を活かし、ぜひとも韓国を旅行し、異国の社会に身を置き、様々な文化や人間と接して国際感覚を磨きつつ、日本という国や社会を客観的に見ることの方法も体得してほしいと伝えている。

とはいえ、政策科学科の学生を中心とする受講生の中で、韓国に興味を持ち、直接韓国に足を運ぶ学生は少数である。コロナ禍で海外に誰もが行けない今だからこそ、このような好条件を理解して海外渡航が再び許可された際には韓国を訪問してもらいたいと考え、興味のない学生に対して少しでも興味を持ってもらう方法はないものか、常に自らに問いかけていた。

日本にとって、韓国は長年「近くて遠い国」と言われ続け、20 世紀後半（特に 1990 年代）には従軍慰安婦問題や竹島（韓国では独島）をめぐって、日韓の外交関係は悪化していった。しかし、1998 年金大中大統領政権の誕生とともに、日本との文化交流が盛んになってくる[2]。2003 年に韓国ドラマ『冬のソナタ』が日本での放映以降、空前の韓流ブームが起き、以降、K-pop ブームや韓国文学ブームにつながっていった。韓国が身近に感じられるようになり、筆者にとって同科目を非常に教えやすい環境が整ったが、ぜひ現地への訪問意欲を高め、さらに現代の歴史や社会に関心を持ってもらう方法がないのかを考えていた。その時に、韓国の現代の歴史や社会を知る導入的な教材として韓国映画『ラブストーリー（原題：クラシック）』と偶然出会い、それを受講生に見せ、ある程度手ごたえのある評価を得たので、毎年、教材として使用することに決めた。では、本映画は受講生によってどのような評価を得たのだろうか。

本稿は、次章以降同映画がいかに韓国の現代史や社会状況を網羅しているかをストーリーの紹介と補足説明を通して示したうえで、受講生がどのような印象を抱き、さらに本映画が韓国学習の教材に適しているかについて、簡易アンケート調査から考察する。今回、本稿を書くにあたって、受講生は講義の中で本映画を視聴したためストーリーを知っているが、他方、本稿の読者の大半はストーリーを知らないと考えられるので、次章で簡潔にストーリーを示すことにする。

第２章　韓国映画『ラブストーリー（原題：クラシック）』の特徴

本映画は133分で、2003年1月に韓国で一般公開された。監督は、2001年『猟奇的な彼女』で一躍有名になったクァク・チェヨンで、主役は、この間の新型コロナ禍の巣ごもり状態のなかで日本人の多くが視聴し､有名になった映画『愛の不時着』でも主役を務めた女優ソン･イェジン（손 예진)、主役男優は、チョ・スンウ（조승우）とチョ・インソン（조인성）である。物語は、現在、大学に通うテコンドー好きのジヘが、母親ジュヒの留守中に部屋を整理していると、母親が高校生時代に受け取ったラブレターの束を見つけ、それらを読むところから始まる。母親の高校時代の1968年とジヘの大学時代である2000年代初めの二つの時期を対象に、ソン・イェジンが母娘の二役を演じ、1960年代後半の水原（スウォン：地名）で母親が高校生であった時の恋愛と娘ジヘが大学生の時の恋愛を比較した内容になっている。特に、儒教色がまだ色濃く残る1960年代の地方を舞台に、国会議員の娘であった母親ジュヒは、親が決めた許婚者テスがいるものの、高校生時代に純粋に恋愛の相手だった青年ジュナは、その許婚者テスの友人であった。二人は、親に秘密で交際を続けるが、家庭環境の違いから、周囲の大人には認めてもらえなかった。運命として別離を受け入れざるを得なかったジュナは、高校卒業後、ベトナム戦争に参加し、爆弾により目に傷を負い、失明する。ベトナムから何とか帰国したジュナはジュヒに会うも、立場の違いを理解し、失明という障害を持っていることを隠し、すでに結婚しているとのうそをついてしまう。それを信じてしまったジュヒもその後、結婚して娘のジヘを産む。ジヘがまだ幼少のころ、母親ジュヒと川で遊んでいるときに、ジュナの親族関係の男性3人が現れ、ジュナはジュヒが結婚した後に結婚し男の子を授かり、その後、死去したことを伝え、遺灰を川に撒く。その事実を知り、また様子を見て、ジュヒは思わず、その場で泣き崩れてしまう。相思相愛であっても、時代の社会的な制約は恋愛が成就することを阻み、悲恋という結末を生み出したのである。

一方、時代は変わって今世紀初頭、現在の大学生のジヘは大学の先輩のサンミンに好意を抱いていたが、当初、ジヘは、サンミンが自らの親しい女友達に好意を持ち、付き合っていると勘違いしていた。実は、サンミンもジヘに好意を持っており、そのことは置き傘事件をめぐって、相思相愛であることを確信し、最終的には二人は付き合うようになる。最後に、サンミンが偶然にもジュナの息子であったということも、首にかけていたペンダントをジヘにかけたことで、ジヘは気付き、母親ジュヒの時代に結ばれなかった母親とサンミンの父親ジュナの悲恋は、双方のわが子たちの恋愛が実ったことを通じてハッピーエンドで終わる。その最後の二人の帰り道の風景は、橋を渡るときに、1960年代後半の風景に変わり、ホタルが乱舞し、サンミンがその中の一匹を捕まえ、ジヘに見せ、解き放つという幻想的、情緒的な場面で終わる。

以上が、ストーリーであるが、さらに理解を深めるためには、ここで両時期の政治・経済・社会事情の違いについて説明する必要がある。特に、母親の1960年代後半の時期には、朴正熙大統領の軍事政権時代下の政府による政治状況や社会状況、特に、学生たちによるベトナム戦争参加反対のデモとそれへの弾圧、国を挙げてのベトナム戦争への参加及び北ベトナム軍兵士やベトナム解放戦線兵士との戦闘、高等学校時代の教師による生徒へのバットによる殴打（体罰）、社会的身分の相違による自由な恋愛と結婚の制限などが映画の中で色濃く現れており、2000年代の大学のキャンパスで自由に恋愛できる状況が象徴的に対比され、わずか三十数年で韓国社会がこれほどまでに変化したことに視聴者は圧倒される。同時に、1960年代後半の時期の水原の農村の自然の美しさ、川の上を乱舞しているホタルの群、牛の糞に寄生するフンコロガシなどの昆虫、雨や虹などの自然現象が醸し出す美が映像を通して惜しみなく描き出されている。当時の自然環境のすばらしさと社会環境の厳しさも対比されている。

第３章　韓国映画『ラブストーリー（原題：クラシック）』鑑賞後の受講生の反応

前章では本映画の特徴を紹介した。『アジア地域社会論』では、本映画の意味を理解できたかを知るために、鑑賞後に、アンケート調査をしている。質問項目は、鑑賞年によって少し異なるものの、韓国での出来事、有名人物の認知、感動した場面、さらには10点満点中の得点（評価）、最も印象に残ったところを書いてもらった。

第１節　韓国での出来事・有名人物の受講生たちの認知度

K-popを身近な音楽としてとらえるようになった現在の日本の大学生にとって、韓国の諸事情にどこまで精通しているのかを尋ねたものが、表１の韓国での出来事・有名人物の認知度調査の結果である。各項目に関して少し説明を加えておこう。歴史上の有名な人物である李氏朝鮮時代の世宗大王は、４代目の王であり、ハングル（韓国語の文字）を開発し、盤石な李氏朝鮮時代の基礎を築いた。李舜臣は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の文禄・慶長の役において朝鮮水軍を率いて日本軍と戦った武将である。この二人は、韓国の歴史上の人物で非常に有名である。韓国の歴史ドラマが好きであれば、大半の人々は知っていると考えられる。朴正熙は、大韓民国成立後第５代から第９代大統領（在任1963年－1979年）として大統領の任期を５期に亘って務め、権威主義体制による開発独裁を推し進めた人物である。この間に、ベトナム戦争参加への決定、経済的には1960年代後半から「漢江の奇跡」として急速な経済成長に貢献した。

皇民化政策は、日本の植民地支配の1930年代に、同化政策の一環として神社参拝、宮城遙拝、日本語教育や創氏改名を行ったことを指す。光州事件は、1980年に光州市民が独裁政権に対

して立ち上がった事件で、軍が光州市民に対して発砲し、数多くの犠牲が出た歴史的出来事である[3]。キロギ・アッパは、子どもに英語教育を受けさせるために、母親が子どもと一緒に外国に暮らす一方、外国にいる母娘の教育・生活のために韓国内で働き、送金している父親のことを指す。当時、韓国内での受験競争の激しさから、帰国子女枠で受験したほうが志望大学に合格しやすいとして、そのような現象がブームになった。いまだに、韓国ドラマでは、留学が定番になっている。キム･ヨナは、ソチ冬季オリンピックで２位、バンクーバー冬季オリンピックで優勝した女性フィギア・スケート選手で、「国民の妹」と呼ばれている。スポーツとして有名なのは、2002 年の日韓共同で開かれたサッカー W 杯である。このときには、韓国がベスト４、日本がベスト 16 に入った。KARA は、K-pop 女性グループで「少女時代」と人気を博した。

表１　韓国での出来事・有名人物の認知度

（「知っている」との回答者数・割合）

	李氏朝鮮時代の世宗王	李舜臣	朴正熙	皇民化政策	韓国のベトナム戦争参加	光州事件	キロギ・アッパ	キム・ヨナ	サッカー W 杯日韓共同開催	KARA
2014年度	10	23	14	12	20	3	0	54	43	45
	15%	35%	22%	19%	31%	5%	0%	83%	66%	70%
2015年度	9	22	11	17	21	6	0	43	37	36
	17%	42%	21%	33%	40%	12%	0%	83%	71%	69%

{出所}　2014 年度・2015 年度『アジア地域社会論』受講生への調査より

その結果を見ると､2014 年度と 2015 年度の各項目の数値は似ている。8 割を超えているのが、キム・ヨナであり、6 割から 7 割の認知がサッカー W 杯と KARA といった今世紀に入ってのものである。3 割から 4 割が李舜臣とベトナム戦争への参加､1 割から 2 割が世宗大王､朴正熙､皇民化政策である。これらは、世界史の教科書に記述されていると考えられる。光州事件の認知度は非常に低く、さらに、最近の韓国の教育熱や留学指向といった社会現象を示したキロギ･アッパは誰も知らなかった。

このように見てくると、韓国について全く知らない受講生はごく少数で、最近の出来事についてはかなり多くが知っている傾向にあることが理解できる。

第２節　受講生たちの韓国への関心度

では、韓国に対する関心度はどれほどのものであろうか？受講生たちが韓国に対してどれぐらい好感を持っているかを尋ねたところ、表２のような結果になった。性別で差異が出てきていることが理解できる。男性の場合、「どちらでもない」が３分の２を占め、次に「どちらか

と言えば好き」が 4 人に一人の割合でいる。他方、女性の場合は、「どちらかと言えば好き」が半数近くいて、「どちらでもない」をかなり上回っている。また、「とても好き」も 3 人いることが理解できた。結果として、女性の方が韓国に対して強い関心を持っていることが理解でき、さらに、男女総合した場合、半数がどちらでもないであり、4 割が好感を持っており、好感を持っていない受講生が 1 割弱であった。

表2　2014 年度韓国への好感度

好き嫌い／性別	とても好き	どちらかと言えば好き	どちらでもない	どちらかと言えば嫌い	とても嫌い	計
男性	1	10	24	2	1	38
（%）	3%	26%	63%	5%	3%	
女性	3	13	8	2	1	27
（%）	11%	48%	30%	7%	4%	
計	4	23	32	4	2	65
（%）	6%	35%	49%	6%	3%	

{出所} 2014 年度『アジア地域社会論』受講生への調査より

第 3 節　映画に対する評価

この映画に対する受講生の評価（2012 年度）は、10 点満点中で、男性の平均点は 8.1 点、女性は 8.3 点で性別ではほとんど差は出ていない。男女合計での平均点は 8.2 点となり、かなり高得点であることがわかる。点数別にみると、女性の方が少しだけ、高得点を与えていることが理解できる。9 点が 25%、10 点が 23%と、両得点でほぼ半数を占めている。

表3　2012 年受講生映画評価（10 点満点）

性別／点数（10 点満点）	3	4	5	6	7	8	9	10	総計
男性	1 (2%)		1 (2%)	4 (6%)	15 (22%)	19 (28%)	16 (23%)	12 (17%)	68 (100%)
女性	2 (2%)	1 (1%)	2 (2%)	1 (1%)	11 (12%)	30 (34%)	22 (25%)	20 (23%)	89 (100%)
総計	3 (2%)	1 (1%)	3 (2%)	5 (3%)	26 (17%)	49 (31%)	38 (24%)	32 (20%)	157 (100%)

{出所} 2012 年度『アジア地域社会論』受講生への調査より

本調査は年 1 回鑑賞して行っているが、2014 年度にも同様の調査を行った。

表4　韓国映画「ラブストーリー（原題：クラシック）」に対する2014年度受講生の評価

	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点	計
男性			2	3	10	5	7 (19%)	10 (27%)	37
女性	1			5	4	9	1	7 (26%)	27
計	1		2	8	14	14	8 (13%)	17 (27%)	64

{出所}　表2に同じ

結果は、男女合わせて10点満点を付している割合が27%を占め、男女ともにその割合に差はない。男性では、46%とほぼ半数の受講生が9点か10点を付している。この傾向は、2012年度とほぼ変わってはいない。次に、2015年度の場合は、2012年度や2014年度に比べ、多少低い評価である。男女合計で、9点と10点満点を合算しても、26%にしか達せず、8点を加えれば、半数近くになる。

表5　韓国映画「ラブストーリー（原題：クラシック）」に対する2015年度受講生の評価

	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点	計
男性	1	1			2	5	13 (34%)	8 (21%)	4 (10%)	4 (10%)	38
女性					1		2	5 (36%)	3 (21%)	3 (21%)	14
計	1	1			3	5	15 (19%)	13 (25%)	7 (13%)	7 (13%)	52

{出所}　2015年『アジア地域社会論』受講生への調査より

このように年度ごとの受講生の評価を見ると、2015年度には多少下がっているものの、9点や10点が半数以上も占めたという事実から、いかに評価の高い映画かということが理解できた。

第4節　もっとも印象深かった場面

そのように高い評価を受けた映画であるが、では、映画の中で最も印象に残った場面はどのようなものであったのだろうか？そのことを尋ねたところ、表6のような結果になった。ただし、受講生に一つだけでなく二つを記してもらっている。回答はややばらつき、集中した場面はなかったが、それでも、1960年代後半の水原の農村地域でのホタル取りが全体の3分の1を占めた。1961年に軍事クーデターで政権を掌握した朴正熙は、「漢江の奇跡」と呼ばれるほど、1960年代後半から韓国経済の成長を順調に伸ばしていった。1960年代前半から中盤にかけての農村地域は、セマウル運動がまだ実施されていない時期で、韓国の農村の原風景を残し

表6　最も印象に残った場面（2つの回答可）

順位	場面	人数（155人二つを書く）	%
1	1960年代後半の水原の農村の川での蛍とり	52	34%
2	両時代の雨のシーン（＊ジへとサンミンが雨の中、サンミンのジャケットをかぶり図書館に行く、＊夕立ちにあい、雨宿りの傍らスイカを食べる	35	23%
3	ベトナムの戦場でのシーン	32	21%
4	テスが学校の保健室で首つり自殺をするシーン（未遂に終わるが）	20	13%
5	ベトナム戦争から帰還したジュナとジュヒがレストランで会うシーン	19	12%
6	川岸でジへが親のことを語った時にサンミンがペンダントを見せたシーン	16	10%
7	ジュナがベトナム戦争に行くジュナの汽車を追いかけるシーン	14	9%
8	ジュヒがジへを連れて川にいた時、ジュナの遺灰が届けられたシーン	9	6%
8	大学の購買部でサンミンの置き傘の話を聞いて雨の中出ていくシーン	9	6%
10	昔の農村の自然風景	8	5%
11	遅刻をしてきた時に正門付近で尻を棒で叩かれる懲罰	7	5%

｛出所｝　2012年度『アジア地域社会論』受講生への調査結果より作成。

ていた。よって、川辺にはホタルが乱舞している場所もあった。

3位のベトナムの戦場でのシーンは、部隊がベトナム兵との銃撃戦で劣勢になり、退却する際に、ジュヒからもらったペンダントがないことに気づき、元の場所まで戻り、ペンダントを見つけ出し、ヘリが待機している場所まで駈けている最中に爆撃にあい、飛ばされてしまうといった場面である。命を賭けて想い出のペンダントを守る姿に受講生は感動したと考えられる。ベトナム戦争に関連した場面は、その他に、5位にベトナムから帰還したジュナがジュヒと会い、涙する場面、さらには7位にジュナがベトナム戦争に行くジュナの汽車を追いかける場面の二つの場面が選ばれている。受講生にとって、命を失くす危険性があり、二人を永遠に引き離してしまうかもしれない戦争という出来事を選んだ背景には、韓国がなぜ参戦したのかを知りたいという知識欲のようなものがあったからだろう[4]。

これらのもっとも感動したことをさらに詳しく書いてもらったのが、以下のような回答であった。

1．ラストシーンです。後半の展開が急すぎて驚くことが多かったが、結ばれなかったジュナの息子であるサンミンとジュヒの娘であるジへがそうとは気付かずに出会ってそして結ばれたところが最も感動した。大体、恋愛映画と言うと、恋人が死んで涙を誘って、そ

れでも前を向いて歩こう見たいな感じだが、このようなハッピーエンドもあるのかと感心した。

2．サンミンがジュナの子どもというのも驚きで、ドラマ「ラブレイン」に少し似ていると思った。どちらも感動したが。

3．ジュナが遺灰を川へ撒くことを望み、それが実現されたシーン。ジュナとジュヒが初めてデートした場所であり、最後まで彼女を思い続けていたというのがわかり、とても感動的であった。また、ジュヒが子どもジヘを連れていたのも切なかった。

4．ジュナは自分の目が見えなくなったため、ジュヒと結婚すると迷惑をかけると思い、自分はもう結婚したという嘘をつくことで、ジュヒを他の男性と結婚させていたところが感動した。好きな女性には幸せになって欲しいという男性は素敵だなと思う。

5．登場人物（高校生テス）が自分のことよりも他人の幸せを考えて行動しているところがとても心に残った。親に縛られながらも、友のことを思い、自殺までしようとしたり、ジュヒは互いに周りに認められないとわかり、相思相愛でも距離を取り、違う人生を歩み出すところはとても切なく、その時代のシキタリだったのかなと思った。

第５節　映画鑑賞後の韓国へのイメージの変化

最後に、映画を鑑賞して、鑑賞前の韓国へのイメージが変わったのかを調査したところ、表７のような結果になった。男女とも最も多い回答が、「普通→良い」となり、男性は約半数が、女性の場合は３分の１であった。その次に多かったのが、「普通→普通」で３分の１である。あとは、「良い→もっと良い」が男女を合わせ、約１割となっている。

この結果が示しているように、本映画の鑑賞は、受講生が抱いていた韓国のイメージをさらに良くし、韓国の諸事情を理解することに非常に貢献していると言える。

表７　映画鑑賞後の韓国へのイメージの変化

	悪い→普通	普通→良い	良い→もっと良い	悪い→悪い	普通→普通	良い→良い	普通→悪い	良い→普通	他	計
男性		18	4	3	12				1	38
%		47%	10%	5%	32%					
女性	1	10	2	1	7	4	1	1		27
%		37%	7%	4%	26%	15%				
計	1	28	6	4	19	4	1	1		65

{出所}　表２に同じ

むすびにかえて

新型コロナ禍の中で、気軽に海外に行くことを絶たれている現在、筆者が担当する講義科目『アジア地域社会論』の狙いが、アジアの国々に出かけることにより、日本人が周囲にいない状況に身を置くことで、日本とは何かを相対的に観てほしかったことにあったのだが、現実はそれをはばんでいる。元来、韓国が近くて安く行ける国にもかかわらず、筆者が属する政策科学科の学生は自ら海外に足を運ぶことをあまりしない傾向にある。隣国の韓国は外国人が、労働者や花嫁として多数入ってきており、人口の５％を元は外国籍の人々が占めるのは時間の問題と言われている。

日本も、韓国ほどの速度ではないが、外国籍の人々が増えつつあるのは確かである[5]。その際に、同一社会において共生とはいかなるものかを知っておいたほうが現実の労働や生活の場できちんと対応できる。その意味で、自らとは異なる文化を知ることは重要になってくる。では、直接行かないで、少しでも外国、特に、一番近い国＝韓国に興味を持ってもらう方法はないのか、それを考えていくうちに、偶然にも韓国映画『ラブストーリー（原題：クラシック）』を見つけた。主人公は、本講義科目の受講生と同じ年代であり、恋愛をめぐってストーリーが展開するので、これこそ興味を持ってくれるものと確信していた。よって、実際に鑑賞してもらい、受講生の意見を集約した。本稿はそれを分析したものとなっている。結果として、評価は非常に高く、韓国の一昔前の歴史や社会、さらには現在を理解でき、韓国への関心を高める作品であることが証明された。

この韓国への関心を維持したまま、韓国に行ける日が来るようであれば、すぐさま出かけてほしい。そして、韓国の社会が多様性をどのように受け入れ、外国人を迎え入れようとしているのか、いないのかを自らの眼で確かめてほしい。

注

1　スタディ・ツアーの教育効果については、筆者が著した次の論文を参照してほしい。「国際理解教育促進のための大学一年次における海外スタディ・ツアーの重要性とその効果～韓国・プサンへのスタディ・ツアーの取り組みを事例にして～」『北九州市立大学法政論集』第 37 巻第 4 号、2010 年 3 月、「バングラデシュへのスタディ・ツアーを通しての学生の価値変容」『北九州市立大学国際論集』第 13 号、2015 年 3 月、「2019 インドネシア･スタディツアーに観る ESD（持続可能な開発のための教育）の概念の理解に関する研究」『北九州市立大学国際論集』第 19 号、2021 年 3 月、「2020 石垣島・沖縄本島へのスタディ・ツアーを通しての学生たちの ESD（持続可能な開発のための教育）のまなび」『北九州市立大学法政論集』第 49 巻第 1・2 合併号、2021 年 10 月。

[2] 日韓の文化交流の背景には、故池明観氏の貢献がある。彼は、1972 年に来日し、その後、東京女子大学教授を務めながら、韓国の民主化運動を支援してきた。1970 年～ 1980 年代、韓国の軍事独裁時代に、韓国民主化闘争の生の声を「ＴＫ生」として世界に発信した。金大中政権では、日韓共同歴史研究韓国側代表、韓日文化交流政策諮問委員長などを務めた。https://www.christiantoday.co.jp/articles/10567/20120516/news.htm　アクセス日 2022 年 1 月 3 日

[3] この光州事件は、『光州 5・18』（2007 年）と『タクシー運転手～約束は海を越えて』（2017 年）などの映画にもなっている。

[4] 韓国政府は、当時、参戦への見返りとして米国政府から多額の補償金を獲得し、それらをインフラ建設などの資金として使用し、経済発展につなげた。1965 年から 72 年まで延べ 31 万人の韓国軍兵士を送り込み、5000 人前後の死者を出した。軍人にはかなりの額の俸給が支払われ、同時に、韓国軍を相手に物資販売などを行う民間企業や小売商が販売市場を拡大した。他方、韓国軍は村民を虐殺したとの報道もされ、1990 年代になり、ようやく、韓国軍によるベトナムの民間人虐殺といった行為を詫びる運動「ミヤネヨ　ヴェトナム（ごめんなさい　ヴェトナム）」キャンペーンがでてきた。同運動は現在も続いており、2021 年は、11 月 28 日に少人数だが、行われた。筆者は、ベトナムの中央に位置するダナン市の戦争記念博物館を訪れた際、最終コーナーで当時の大学院生のコ・ソジョンの「ミヤネヨ　ヴェトナム」の CD が飾られているのを発見した（2002 年寄贈）。その際に、歌詞の内容が気になっていたので、日本への帰国後、同曲を見つけ出した。歌詞を以下に記しておきたい。

ミヤネヨ　ヴェトナム（ごめんなさい　ベトナム）

パク・チウム　曲

아름답게 만날 수도 있었을텐데（美しく会うこともできただろうに）
당신과 마주선 곳은 서글픈 아시아의 전쟁터（貴方と出会った場所は悲しきアジアの戦場）
우리는 가해자로 당신은 피해자로（私たちは加害者で、貴方は被害者で）
역사의 그늘에 내일의 꿈을 던지고（歴史の陰で明日の夢を投げて）
어떤 변명도 어떤 위로의 말로도（いかなる言い訳も、いかなる慰めの言葉でも）
당신의 아픈 상처를 씻을 수 없다는 거 알아요（貴方の痛き傷口を洗えないのは承知のうえ）
그러나 두손 모아 진정 바라는 것은（しかし両手を合わせ真に願うのは）
상처의 깊은 골 따라 평화의 강물 흐르길（傷口の深き谷沿いに平和の川が流れますよう）
전쟁없는 세상에서 살고 싶어요（戦なき世界で生きたいです）
친구와 마주 손잡고 평화를 노래하고 싶어요（友達と手をつないで平和を歌いたいです）
서로를 이해하며 서로를 도와주면서（互いを分かり合い、互いを助け合い）
눈부신 태양 아래 내일의 꿈을 펼쳐요（眩しい太陽のもと明日の夢を開きましょう）
미안해요 베트남（ごめんなさいベトナム）미안해요 베트남（ごめんなさいベトナム）
어둠속에서 당신이 흘린 눈물 자욱마다（闇の中で貴方が流した涙の跡ごと）

어둠속에서 우리가 남긴 부끄러운 흔적마다（闇の中で我々が残した恥かしい跡ごと）
미안해요 베트남（ごめんなさいベトナム） 미안해요 베트남（ごめんなさいベトナム）

なお、韓国軍によるベトナム人虐殺に対するベトナム人の感情・意識、さらには冷え切った外交関係の修復についての取り組みは、伊藤正子 『戦争記憶の政治学―韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』平凡社、2013 年に詳しく記されている。

また、ベトナム戦争による韓国経済の発展過程については、佐野孝治 1992 年 1 月 「韓国経済へのベトナム戦争の影響―韓国における『NIEs 的発展の基礎形成』」（『三田学会雑誌』）に詳しい。

5 朝日新聞紙上で、社会人口学者是川夕と歴史社会学者小熊英二が「移民は日本を変えるか」というテーマで対談し、双方が次のような意見を出している。是川は、国勢調査をもとに文化、労働、教育、結婚などに関して平等性を分析した結果、ゆるやかな社会統合が進行していると捉えている。また、小熊は、日本に長期滞在する外国人が増えれば権利の主張をする人も出てきて、また、入ってきた外国人の振るまいを見て、これがグローバルスタンダードかと気付く日本人もいる。双方が透明性を高めたいと思うようになれば、日本社会が変わる可能性はあると述べている。（『朝日新聞』2022 年 2 月 19 日付）

謝辞

「ミヤネヨ ヴェトナム（ごめんなさい ベトナム）」の歌詞の翻訳にあたっては、本学大学院生の朴賛佑さんにお世話になった。この場を借りてお礼を申しあげる次第である。